

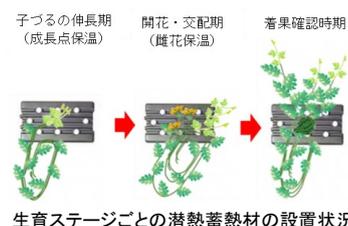
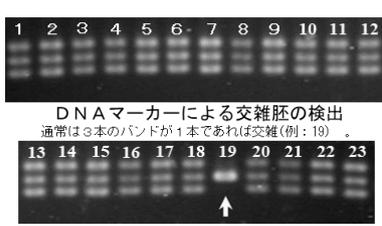
詳細及びその他研究成果情報はこちら



令和2年度

「農業の新しい技術」公表!

- 1 平坦地域で水稻品種「やまだわら」が多収となるm²当たり粒数は40,000粒である
- 2 胚培養とIndelマーカーによるウンシュウミカン品種間交雑苗の作出
- 3 高冷地におけるエゴマの省力安定生産技術
- 4 潜熱蓄熱材の保温効果により半促成無加温スイカの着果率が向上する
- 5 褐毛(あかげ)和種種雄牛「第一光晴」「光重球磨七」「福栄豊」の選抜
- 6 黒毛和種種雄牛「美津福重」「福安照重」の選抜
- 7 ICT養液土耕システムを活用したトマト促成長期栽培の増収効果
- 8 カンキツ「不知火」のこはん症は夏秋期の土壌水分維持と9月施肥で軽減できる
- 9 ハウスミカンでは1月中旬に天敵保護資材を用いた天敵放飼でダニ剤を削減できる



【目次】

- ①優良種雄牛の作出 黒毛和種「美津福重」の選抜 P.2
- ②カンキツ「不知火」のこはん症は夏秋期の土壌水分維持と9月施肥で軽減できる P.3
- ③優良種雄牛の作出 黒毛和種「福安照重」の選抜 P.4

【お問い合わせ先】

畜産研究所
生産基礎技術
研究室

096-248-
6433

黒毛和種種雄牛

「美津福重」

現場後代検定の成績では、**ロース芯面積と脂肪交雑**で去勢、雌ともに県有種雄牛で**歴代1位**を記録しました。育種価においても、ロース芯面積と脂肪交雑が、県内で共用された2,638頭の種雄牛の中で**トップ5**に入る高い評価となりました。また、令和元年9月から凍結精液の一般共用が開始されたばかりですが、精液の払出実績は非常に順調に伸びており、**現場から高い期待が寄せられています。**



【現場後代検定成績】

(単位:kg, cm², cm)

頭数	出荷月齢	枝肉重量	ロース芯面積	ばらの厚さ	皮下脂肪厚	歩留基準値	BMSNo.	肉質等級(4等級以上)
去勢 9 頭	28.3	485.0	75.3	8.0	2.2	76.5	9.44	88.9% (8/9)
雌 11 頭	28.7	469.1	67.5	8.1	2.8	75.2	8.45	100.0% (11/11)

※BMS(牛脂肪交雑基準)…No.1~12で区分され、数字が大きいほど霜降りの度合いが高い

【産子の枝肉】



形質	程度	-1	0	1	2	3	4	程度	SBV
枝肉重量	小さい	[Progressive bar chart]						大きい	2.04
ロース芯面積	小さい	[Progressive bar chart]						大きい	4.08
ばらの厚さ	薄い	[Progressive bar chart]						厚い	2.42
皮下脂肪	厚い	[Progressive bar chart]						薄い	-0.23
脂肪交雑	少ない	[Progressive bar chart]						多い	3.26

性別	去勢
枝重	513kg
ロース	81cm ²
バラ厚	7.3cm
BMSNo.	11
等級	A-5

標準化育種価 (SBV) とは？

各形質の育種価を同一スケール上で比較したもの。値が+1以上の場合、改良効果が高い。

【お問い合わせ先】

果樹研究所
常緑果樹研究室
0964-32-
1723

カンキツ「不知火」のこはん症は夏秋期の 土壌水分維持と9月施肥で軽減できる

近年、「不知火」では、温暖化に伴う異常気象により、収穫前後や貯蔵中に発生する果皮障害、こはん症の発生が問題となっています。

そこで、「不知火」のこはん症（写真1）の発生要因を解明し、発生軽減技術を確立しました。



写真1 こはん症発生果実

◆研究の成果

- 夏秋期の降雨が1週間以上無い時にかん水を行なうことで、こはん症の発生が軽減されます（図1）。さらに、保水マルチを行なうことで土壌水分が長期間保持され、こはん症の発生が軽減されます（図2）。

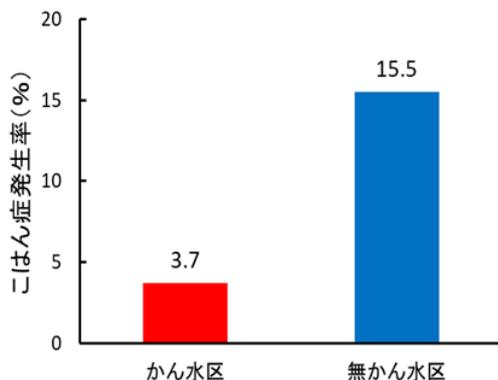


図1 かん水が収穫後果実のこはん症発生に及ぼす影響(2018年)

注)かん水は、8~10月中に5回実施

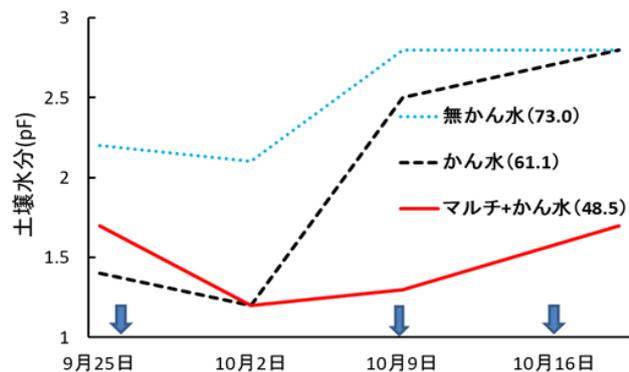


図2 かん水及び保水マルチが土壌水分に及ぼす影響(2015年)

注1) pF値は高いほど土壌が乾燥している指標

注2) 図の矢印はにかん水を行った日

注3) 図中の()内の数字はこはん症発生指標を示す(最大100)

- 同じ年間施肥量でも、9月に施肥を行なうことでこはん症の発生が軽減されます（図3）。
- 以上のことから、対策として、**降雨が1週間以上無い時のかん水（100L/樹）**や、**保水マルチによる土壌水分維持**（pF値おおむね2.4以下）、**9月施肥**をすることで、**こはん症発生は軽減**されます。

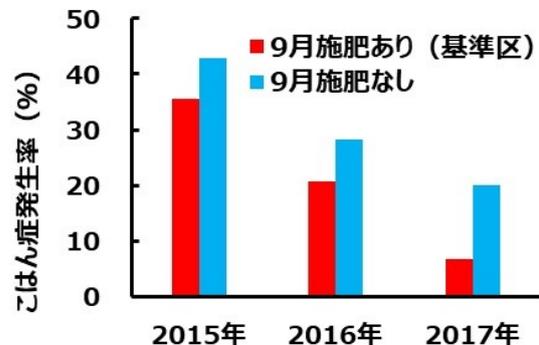


図3 9月施肥の有無がこはん症発生に及ぼす影響

注1)こはん症発生率は貯蔵2か月後の結果

注2)両区とも年間施肥量は26kg/10a。9月施肥ありは3,4,6,9,11月に20%ずつ、9月施肥なしは3,4,6,11月に25%ずつ施肥

◆普及上の留意点等

収穫後のこはん症発生を軽減するためには、貯蔵管理（貯蔵庫内の湿度は85~90%が適しているため、湿度が低い場合には、打ち水やコンテナを不織布シートで囲う等により湿度を維持）にも十分注意する必要があります。

【お問い合わせ先】

畜産研究所
生産基礎技術
研究室

096-248-
6433

黒毛和種種雄牛

ふ く や す て る し げ

「福安照重」

脂肪交雑が「美津福重」に次いで歴代2位を記録し、ロース芯面積も61cm²を超え、**肉質面とロース芯面積の改良**への貢献が期待できる種雄牛です。



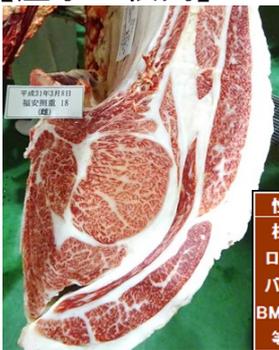
(単位: kg, cm², cm)

【現場後代検定成績】

頭数	出荷月齢	枝肉重量	ロース芯面積	ばらの厚さ	皮下脂肪厚	歩留基準値	BMSNo.	肉質等級(4等級以上)
去勢 14 頭	28.6	445.9	61.8	7.4	1.8	75.2	8.36	92.9% (13/14)
雌 6 頭	28.9	418.0	61.7	7.6	2.4	75.1	7.00	50.0% (3/6)

※BMS(牛脂肪交雑基準)…No.1~12で区分され、数字が大きいほど霜降りの度合いが高い

【産子の枝肉】



性別	雌
枝重	410kg
ロース	75cm ²
バラ厚	7.7cm
BMSNo.	11
等級	A-5

形質	程度	程度	程度	程度	程度	程度	SBV	
枝肉重量	小さい	-1	0	1	2	3	大きい	-0.59
ロース芯面積	小さい	-1	0	1	2	3	大きい	1.65
バラの厚さ	薄い	-1	0	1	2	3	厚い	0.23
皮下脂肪	厚い	-1	0	1	2	3	薄い	1.71
脂肪交雑	少ない	-1	0	1	2	3	多い	2.25

標準化育種価 (SBV) とは?

各形質の育種価を同一スケール上で比較したもの。値が+1以上の場合、改良効果が高い。

KUMAMOTO Pref. 農業研究センター

〒861-1113
熊本県合志市栄3801
tel 096-248-6411 fax 096-248-7039
E-mail noukenkikaku@pref.kumamoto.lg.jp

本紙の内容に関するお問い合わせは、企画調整部 企画情報課までご連絡ください。

農業研究センター HPはこちら →

管理部
総務課
経理課
096-248-6412

企画調整部
企画情報課
096-248-6422
096-248-6423

農産園芸研究所
作物研究室
花き研究室
野菜研究室
096-248-6444

茶業研究所
096-282-6851

高原農業研究所
0967-22-1212

球磨農業研究所
0966-45-0470

生産環境研究所
土壌環境研究室
施設経営研究室
病害虫研究室
096-248-6447

畜産研究所
大家畜研究室
中小家畜研究室
生産基礎技術研究室
飼料研究室
096-248-6433

草地畜産研究所
0967-32-1231

アグリシステム総合研究所
アグリビジネス支援室
フードバレー推進室
生産情報システム研究室
いぐさ研究室
野菜栽培研究室
0965-52-0372

果樹研究所
常緑果樹研究室
落葉果樹研究室
病虫化学研究室
0964-32-1723

天草農業研究所
0969-22-4224